

## 新しい社会を作ろう——福沢諭吉『学問のすすめ』（1872～1876年）

### 1. 学問のすすめ——何のために大学で勉強するのか

「一国の暴政は必ずしも暴君暴吏の所為のみにあらず、その実は人民の無智をもって自ら招く禍なり。他人にけしかけられて暗殺を企つる者もあり、新法を誤解して一揆を起こす者あり、強訴を名として金持の家を毀ち酒を飲み銭を盗む者あり。その挙動はほとんど人間の所業と思われず。かかる賊民を取り扱うには、釈迦も孔子も名案なきは必定、ぜひとも苛刻の政を行うことなるべし。ゆえにいわく、人民もし暴政を避けんと欲せば、すみやかに学問に志し自ら才徳を高くして、政府とあいつし同位同等の地位に登らざるべからず。これすなわち余輩の勧むる学問の趣意なり」（二編 19 頁）。

「今の学者、何を目的として学問に従事するや。不羈独立の大義を求むるといい、自主自由の権義を恢復するといふにあらずや。すでに自由独立というときは、その字義の中におのずからまた義務の考えなかるべからず。独立とは一軒の家に住居して他人へ衣食を仰がずとの義のみにあらず。こはただ内の義務なり。なお一步を進めて外の義務を論ずれば、日本国に居て日本人たる名を恥ずかしめず、国中の人とともに力を尽くし、この日本国をして自由独立の地位を得せしめ、はじめて内外の義務を終わらざるといふべし」（十編 90 頁）。

「古の時代より有力の人物、心身を勞して世のために事をなす者少なからず。今この人物の心事を想うに、あに衣食住のゆたかなるをもって自ら足れりとする者ならんや。人間交際〔＝社会〕の義務を重んじて、その志すところけだし高遠にあるなり。今の学者は、この人物より文明の遺物を受けて、まさしく進歩の先鋒に立ちたるものなれば、その進むところに極度あるべからず。今より数十の星霜を経て後の文明の世に至れば、また後人をしてわが輩の徳沢を仰ぐこと、今わが輩が古人を崇むがごとくならしめざるべからず。概してこれをいえば、わが輩の職務は今日この世に居り、わが輩の生々したる痕跡を遺して遠くこれを後世子孫に伝うるの一事にあり。その任また重しといふべし」（九編 85 頁）。

「学問の本趣意は読書のみにあらずして精神の働きのあり。この働きを活用して実地に施すにはさまざまの工夫なかるべからず。オブセルウェーション (observation) とは事物を視察することなり。リーゾニング (reasoning) とは事物の道理を推究して自分の説を付くことなり。…なおこのほかに書を読まざるべからず、書を著さざるべからず、人と談話せざるべからず、人に向かいて言を述べざるべからず、この諸件を用い尽くしてはじめて学問を勉強する人といふべし」（十二編 105 頁）。

## 2. 独立自尊——個人なくして社会は成り立たない

### 第一条：独立の気力なき者は国を思うこと深切ならず

「独立とは、自分にて自分の身を支配し、他によりすがる心なきをいう。自ら物事の理非を弁別して処置を誤ることなき者は、他人の智恵によらざる独立なり。自ら心身を勞して私立の活計をなす者は、他人の財によらざる独立なり。人々この独立の心なくしてただ他人の力によりすがらんとのみせば、全国の人みな、よりすがる人のみにてこれを引き受くる者はなかるべし」(三編 22 頁)。

「外国に対してわが国を守らんには、自由独立の気風を全国に充満せしめ、国中の人々、貴賤上下の別なくその国を自分の身の上に引き受け、…おのおのその国人たるの分を尽くさざるべからず」(三編 23 頁)。

### 第二条：内に居て独立の地位を得ざる者は、外に在りて外国人に接するときもまた独立の権義を伸ぶること能わず

「独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐るる者は必ず人に諛うものなり。常に人を恐れ人に諛う者はしだいにこれに慣れ、その面の皮、鉄のごとくなりて、恥ずべきを恥じず、論ずべきを論ぜず、人をさえ見ればただ腰を屈するのみ」(三編 25 頁)。

「たとえば田舎の商人ら、恐れながら外国の交易に志して横浜などへ来る者あれば、まず外国人の骨格たくましきを見てこれに驚き、…すでに胆を落として、追々この外国人に近づき取引するに及んでは、その駆引きのするときに驚き、あるいは無理なる理屈をいいかけらるることあれば、ただに驚くのみならずその威力に震い懼れて、無理と知りながら大なる損亡を受け大なる恥辱を蒙ることあり。こは一人の損亡にあらず、一国の損亡なり。一人の恥辱にあらず、一国の恥辱なり」(三編 25 頁)。

### 第三条：独立の気力なき者は人に依頼して悪事をなすことあり

「旧幕府の時代に名目金とて、御三家などと唱うる権威強き大名の名目を借りて金を貸し、ずいぶん無理なる取引をなせしことあり。その所業はなはだ悪むべし。自分の金を貸して返さざる者あらば、再三再四、力を尽くして政府に訴うべきなり。しかるにこの政府を恐れて訴うることを知らず、きたなくも他人の名目を借り、他人の暴威によりて返金を促すとは卑怯なる挙動ならずや」(三編 26 頁)。

「このち万々も外国人雑居などの場合に及び、その [外国人の] 名目を借りて奸を働く者あらば、国の禍、実にいうべからざるべし。ゆえに人民に独立の気力なきはその取扱いに便利などとして油断すべからず。禍は思わぬところに起こるものなり。国民に独立の気力いよいよ少なければ、国を売るの禍もまたしたがってますます大なるべし」(三編 27 頁)。

「今の世に生まれいやすくも愛国の意あらん者は、官私を問はずまず自己の独立をはかり、余力あらば他人の独立を助け成すべし。父兄は子弟に独立を教え、教師は生徒に独立を勧め、士農工商ともに独立して国を守らざるべからず」(三編 27 頁)。

### 3. 新しい社会の構想——タテ型からヨコ型への転換

#### タテ型社会(封建社会)の弊害

名分とは…「世の中の人をば悉皆、愚にして善なるものと思ひ、これを救ひこれを導き、これを教えこれを助け、ひたすら目上の人命に従いて、かりそめにも自分の了簡を出ださしめず、目上の人はいたい自分の覚えたる手心にて、よきように取り計らい、一国の政事も一村の支配も、店の始末も家の世帯も、上下心を一にして、あたかも世の中の人間交際を親子の間柄のごとくになさんとする趣意なり」(十一編 95 頁)。

「怨望の流行して交際を害したるものは、わが封建の時代に沢山なる大名の御殿女中をもつて最とす。そもそも御殿の大略をいえば、無識無学の婦女子、群居して無智無徳の一主人に仕え、勉強をもって賞せらるるにあらず、懶惰によりて罰せらるるにあらず、諫めて叱らるることもあり、諫めずして叱らるることもあり、言うも善し言わざるも善し、詐るも悪し詐らざるも悪し、ただ朝夕の臨機応変にて主人の寵愛を僥倖するのみ」(十三編 116 頁)。

「たまたま朋輩に立身する者あるも、その立身の方法を学ぶに由なければ、ただこれを羨むのみ。これを羨むのあまりには、ただこれを嫉むのみ。朋輩を嫉み、主人を怨望するに忙わしければ、なんぞお家の御ためと思うにいとまあらん。忠信節義は表向きの挨拶のみにて、その実は壘に油をこぼしても、人の見ぬところなれば拭いもせず捨て置く流儀となり、はなはだしきは主人の一命にかかる病の時にも、平生朋輩の睨み合いにからまりて、思うままに看病をもなし得ざる者多し。なお一步を進めて怨望嫉妬の極度に至りては、毒害の沙汰も稀にはなきにあらず」(十三編 117 頁)。

#### ヨコ型社会(近代社会)を作るには

「人に交わらんとするには、ただに旧友を忘れざるのみならず、兼ねてまた新友を求めざるべからず。人類あい接せざれば互いにその意を尽くすこと能わず、意を尽くすこと能わざればその人物を知るに由なし。試みに思え、世間の士君子、いったんの偶然に人に遭うて生涯の親友たる者あるにあらずや。十人に遭うて一人の偶然に当たれば、二十人に接して二人の偶然を得べし」(十七編 159 頁)。

「人望栄名なぞの話はしばらくおき、今日世間に知己朋友の多きは、差し向きの便利にあらずや。先年宮の渡しに同船したる人を、今日銀座の往来に見かけて双方図らず便利を得ることあり。今年出入りの八百屋が、来年奥州街道の旅籠屋にて腹痛の介抱してくれることもあらん」(十七編 159 頁)。

「人類多しといえども鬼にもあらず蛇にもあらず、ことさらにわれを害せんとする悪敵はなきものなり。恐れ憚るところなく、心事を丸出しにして颯々と応接すべし。ゆえに交わりを広くするの要は、この心事をなるたけ沢山にして、多芸多能、一色に偏せず、さまざまの方向によりて人に接するにあり。あるいは学問をもって接し、あるいは商売によりて交わり、あるいは書画の友あり、あるいは碁将棋の相手あり、およそ遊冶放蕩の悪事にあらざるより以上のことなれば、友を会するの方便たらざるものなし。あるいはきわめて芸能なき者ならばともに会食するもよし、茶を飲むもよし。なお下りて筋骨の丈夫なる者は腕押し、枕引き、足ずもうも一席の興として交際の一助たるべし。…世界の土地は広く、人間の交際は繁多にして、三五尾の鮒が井中に日月を消すとは少しく趣を異にするものなり。人にして人を毛嫌いするなかれ」(十七編 159頁)。

### 【読書案内】

福沢諭吉『学問のすすめ』(中公クラシックス、2002年)

『学問のすすめ』にはいくつかの版が出ているが、この版がいちばん読みやすく、福沢の肉声がじかに聞こえてくる感じがする。

福沢諭吉『福翁自伝』(ワイド版岩波文庫、1991年)

漫画のように読める痛快な自伝。手塚治虫のひいおじいさんの手塚良庵も登場する(一方、手塚治虫の幕末漫画『陽だまりの樹』小学館、には若き日の福沢が登場する)。

福沢諭吉『文明論之概略』(岩波文庫、1995年)

『学問のすすめ』と同時期に書かれた福沢の最高傑作。日本を文明化する構想が体系的に述べられている。『学問のすすめ』よりちょっと難しい。

丸山眞男『「文明論之概略」を読む』(上・中・下、岩波新書、1986年)

稀代の大学者が『文明論之概略』をテキストにして行なった名講義の記録。古典をどうやって読んだらよいかかわかった気分になる。

丸山眞男『福沢諭吉の哲学』(岩波文庫、2001年)

「福沢諭吉の儒教批判」「福沢諭吉の人と思想」「福沢における「惑溺」」など、福沢の思想の核心に鋭く肉迫した論文集。

上村泰裕「福沢諭吉『学問のすすめ』ノート」(2004年)

[www.mt.tama.hosei.ac.jp/~kamimura/fukuzawa.doc](http://www.mt.tama.hosei.ac.jp/~kamimura/fukuzawa.doc)